

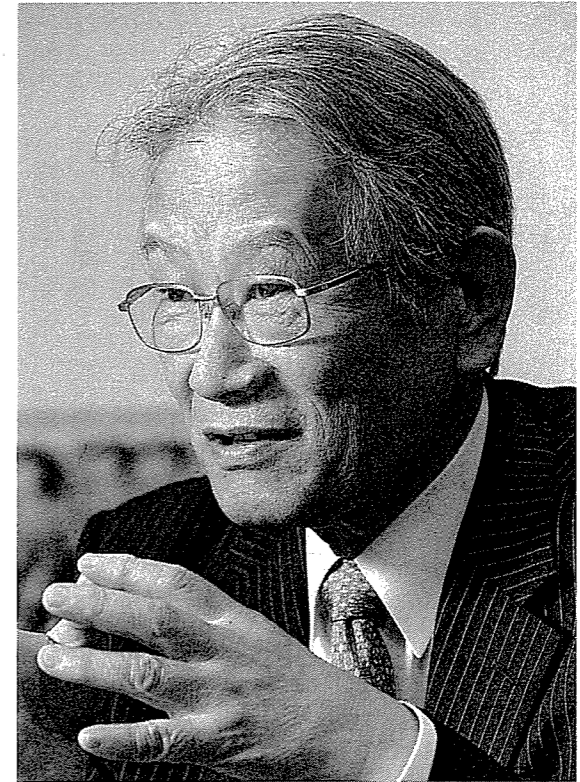
「自由の学風」を貫く 京都大学

少子化が進み全入時代に突入した大学は、大きな変革を求められている。「自由の学風」を貫き、今年創立115年を迎えた京都大学も例外ではない。特に国際化は総合大学に

は必須の課題で、グローバルリーダーの養成に力を注ぐという「西の雄」の動向が注目される。10月に就任5年目を迎える松本紘25代総長に聞いた。

松本 紘 総長に聞く

グローバルリーダーを目指せ



まずは入試改革

国際化の一つとして秋入学の検討など大学は変革を求められています。

松本 大学をめぐる環境は変わりました。入試制度も高校までの学習の内容も。塾もそうですね。授業料が年に200万円以上もする小学生の塾があるんです。京大は54万円です。有名な塾に行くための塾もある。そういうところと受検勉強した人が有名大学に入ってくる。学習指導要領も変わって、入試に必要な人は日本史や世界史をやらないうんじゃないかと思うのです。小さいころからずっと受験勉強をしてきたから、大学に入ったからちょっとリラックスしますよね。そのうえ企業による青田買いがあるから3年から就職活動をしなけ

ればならない。これでは大学で落ち着いて本当の勉強ができるはずありません。

このようにシステムを全体で変えなければ、秋入学に移行しても大学が改善されるとは思いません。京大としては、まず学力偏重の入試制度を見直す改革に着手し、秋入学はその後に考えています。

宇宙的視点で

秋入学は留学をしやすくする方策ですが、今の学生は留学したがるんじゃないでしょうか。内向的になっているという指摘もありますが、松本 環境もあるんじゃないでしょうか。特に学部生は、例えば3カ月大学を休んで留学し、そのせいで単位を落とすと留年しなければならぬ。留年すると就職で非常に不利になります。京大では留年しなくていいプログラムを始めていますが、留学先での単

位を認めるなど、もっとシステムを柔軟にする必要があるでしょうね。欧米では3カ月で単位を取るクォーター制を採用していますから、それにも対応しなければいけない。

京大独自に進めている国際化として、学寮制の大学院がありますね。

松本 思修館のことを言われていると思いますが、単なる国際化ではなくグローバルリーダーの養成を目指しています。宇宙からの視点で地球を見て、リーダーとしての責任を果たせる人材ですね。研修施設で昼夜を分かたず教員と一緒に切磋琢磨し、各界のリーダーに生きた教材になってもらいます。また、自分の専門だけでなく、さまざまな科目を学習することになるので、夏休みや冬休みもありませんが、十分な奨励金を給付する予定です。4年目には海外留学も行い、5年目には自らが企画立案し、そのプロジェクト経費も自分で集めて実行することによって、実践力を養うようにします。

知の創造と伝承

大学の教育改革が叫ばれていますが、優秀な大学、優秀な研究者ほど、研究には熱心でも教育はおざなりになりがちなのではないですか。松本 知の創造と伝承の問題でしょう。この二つがつかないといないと大学の魅力はありません。新しい研究を重ねてその成果を体

系化して学生に伝えることが大切です。古い知識を教えるだけならインターネットで調べれば済みますからね。確かに研究に傾きがちになりますが、先生方には、このつながりの重要性を口やかまして言っています。その一つとして、学生が単に伝承を受け継ぐだけではなく、学問の面白さを知り、研究の仕方を自ら学べるように「ポケット・ゼミ」という試みをしています。新入生を対象に10人くらいの規模で、各分野の最先端の研究について講義をします。前期・後期、合わせて3500人くらいのゼミがあり、非常に人気があります。

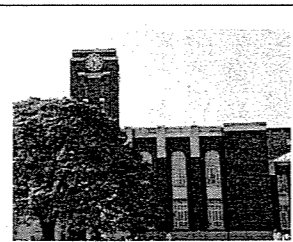
京大を目指す受験生には、どんな志を持ってもらいたいですか。松本 繰り返しになるようですが、どんな分野であれ、グローバルリーダーを目指してもらいたいですね。グローバルというだけではありません。そのうえで、トップとして責任を取れる人を養成したい。ノーベル賞もその一つですが、対象になっていない学問でも、学問以外の産業界や文化人でもね。

(聞き手 真鍋秀典)



「思修館」複合的な社会的課題の解決を担うことができるグローバルリーダーの養成を目指す大学院。平成25年度設置に向けて準備が進んでいる。学生は専用の研修施設で暮らし、昼夜を分かたずに文理融合のさまざまな学問を修める。選抜された奨励金や研究活動費の支給を受ける。

大学のシンボル「時計台」



京都大の正門をくぐるとすぐ目につく鐘の音のシンボル「時計台」の建物がある。「時計台」のシンボルとして、今も愛称で親しまれている。工学部建築学科の教授を務めた武田五一が設計。大正14(1925)年に完成した。当時の最新技術であった鉄筋コンクリート造りで、外観を飾る鮮やかな赤レンガが評判となった。入学式の場として利用されたり、学生紛争で閉鎖されたりしたこともあるなど、京大のさまざまな歴史を見守ってきた時計台。平成5年には外観の修復工事が行われ、今ではフレンチレストランや学生会などが開催されるホールもできて幅広く利用されるようになった。来年「米寿」を迎え、大学の歴史にさらなる時を刻む。

京都大学 115年の歩み

明治2年(1869)	京都大学の源流といわれる「舎密局」創立。近代日本で初めての化学と物理を教える学校として大阪城西に開校した。
19年	複数回の名称変更を経て、全国で5校ある高等中学校のひとつ、「第三高等中学校」が設立。
22年	第三高等中学校が大阪から京都・吉田の地に移転。
27年	学校制度改定により、第三高等中学校へと改称。旧制三高が誕生。
30年	京都帝国大学設置の勅令が制定。初代総長に帝国大学教授を務めた木下広次が就任。
大正8年(1919)	既設の5分科大学が法学部・医学部・工学部・文学部・理学部となり、経済学部を新設。
14年	時計台完成。
昭和15年(1940)	学旗・学歌を制定。
18年	出陣学徒の壮行式を農学部グラウンドで挙げる。
21年	京大史上初となる女子学生が合格。
22年	京都帝国大が京都大学に改称。
24年	国立学校設置法が公布され、新制大学制度発足。教育学部を含む8学部での新制京都大学がスタート。「中間子論」を発表した理学部の湯川秀樹教授がノーベル物理学賞を受賞。
25年	第三高等学校を廃止。
40年	理学部出身の朝永振一郎氏がノーベル物理学賞。
56年	「フロンティア軌道理論」を発表した工学部の福井謙一教授がノーベル化学賞。
62年	抗体の多様性を生み出すメカニズムを解明した理学部出身の利根川進博士がノーベル医学・生理学賞。
平成5年(1993)	教養部を廃止。一般教育と専門教育という従来の教育区分はなくなり、4年一貫教育に移行。
13年	工学部卒の野依良治氏が、ノーベル化学賞。
15年	大学院工学研究科、桂キャンパスへの移転を開始。「京都大百周年時計台記念館」が完成。
16年	国立大学の法人化に伴い、国立大学法人京都大学となる。
18年	山中伸弥教授がマウスiPS細胞の生成に成功。
20年	粒子と反粒子の違いを説明する「小林・益川理論」を発表した益川敏英名誉教授がノーベル物理学賞。

※ 産業経済新聞社の許可を得て掲載しております。無断で転載・複写することを禁じます。